

# 間テキスト性と déjà lu

## —立松和平『性的黙示録』におけるサリンジャーとドストエフスキーの痕跡—

梅 村 博 昭\*

(平成 20 年 5 月 13 日受付/平成 20 年 9 月 2 日受理)

要約 : déjà lu とは「すでに読んだことがあるという認識」である。テキストを読む「わたくし」が、作品 B のなかに作品 A に似た何かを発見するとき、「わたくし」が作品 A をかつて読んだことがあるというまさにそのことが事態の本質をなしている。つまり生きられた体験としての間テキスト性を観察するとき、その中核をなすのが déjà lu という概念なのである。本論では立松和平『性的黙示録』にあらわれる夜汽車の場面が、サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』におけるホールデンとミセス・モロウとの出会いに酷似しているという発見を糸口に、déjà lu が間テキスト的読解へと展開していく過程を考察する。そのさい、ある種の理論家が唱える理念的な「読者」概念と生身の「わたくし」の経験の落差を記述する、という手法をとる。標準的なロシア文学研究者が『性的黙示録』のなかに認める déjà lu はドストエフスキーの諸作品の痕跡であると考えられるが、生身の「わたくし」が体験した déjà lu はサリンジャー作品の上記の場面なのである。そしてサリンジャーと立松を対比させながら読むという営為もまた、両作家の作品の意義の解明に通じていることを示す。

キーワード : 間テキスト性, サリンジャー, ドストエフスキー, 立松和平

### I. déjà lu (既読感)

ワフテルはその著『期待の戯れ——ロシア二十世紀演劇における間テキスト性』の序文で次のように述べている。「人が一篇の詩を読む過程で、何か他の文学的源泉からとられた素材の存在に気づくとき、その反応は本質的に個人的なものである。あなたにはそのつながりが見えてしまい、そのつながりの意味するところは（あなたがあえてそれを追求するならば）まずもってあなた自身の読書体験によって決まってくるのだ。そしてもちろん、あなたがその引用を認識しないならば、それはあなたのその詩の読解にとっては存在しないというだけである」<sup>1)</sup>。これは、間テキスト性と呼ばれる現象のある一面を的確に言い当てた指摘である。作品 B のなかに作品 A が影を落としていることの発見は、つねにテキストを読むわたくしの中でなされる。わたくしがかつて作品 A を読んだことがなければ、そのような発見は起こりようがない。そして作品 A を読んだことのあるわたくしが必ず作品 B を手に取るとは限らない。それは端的に偶然の連鎖の結果でしかない。間テキスト性をこの側面ととらえるとき、作品 A が作品 B に本当に影響を与えたのかどうか（作品 B の作者が作品 A を念頭においていたのかどうか）はむしろ問題ではなくなる。わたくしが作品 B のなかに作品 A の面影を認める、そ

していつしか作品 A とのつながりの中でしか作品 B を読むことが出来なくなっている、ということが事態の本質である。

この現象を一言で言い表す用語をわれわれはすでに持っている。déjà lu である。déjà lu とは「すでに読んだ〔体験した〕ことがあるという認識」（『リーダーズ英和辞典』）である。déjà vu が「既視感」と訳されることからするならば、déjà lu はさしあたり「既読感」とでも訳せばよいだろうか。クリステヴァとともに間テキスト性という概念の提唱者であるバルトはこう述べる。「あるテキストを構成している引用は、作者不詳、出典不明であるが、しかしかつて読んだものである。それは引用符のついていない引用である」<sup>2)</sup>。この「かつて読んだもの」が déjà lues であることは容易に確認できる<sup>3)</sup>。カラーが敷衍するところによれば、間テキスト的コードとは「déjà lu 以外の何物でもない」のである<sup>4)</sup>。

筆者は本論においてひとつの déjà lu について語ろうと思う。具体的には立松和平『性的黙示録』のなかにあらわれるサリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の面影について語ることになる。そのさい、本論の執筆者をさす「筆者」のほかに、テキストの読解を体験する主体をさす「わたくし」という主語を立てる。このような区別は一見煩瑣で不必要と見えるかもしれないが、両者の間に横た

\* 東京農業大学生物産業学部教養分野

わる無視できない亀裂は論の展開とともにのおのずと明らかになるであろう。この作業を通じて、生身の読者が持つ *déjà lu* を精確に再現することこそが、生きられた経験としての間テキスト性を記述するための要であることを具体的に例示したい。

## II. 『性的黙示録』におけるサリンジャーの痕跡

サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の主人公ホールデンは学業不振で退学処分が決定している。時は十二月末、クリスマス休暇の直前の土曜の夜。寮でルームメイトのストラドレイターと掴み合いの大喧嘩をしたホールデンは水曜にはじまる休暇を待たず、そのまま荷物をまとめて寮を出てゆく。退学処分の通知はまだニューヨークの両親の手元には届いていない。それまで安いホテルでもさがして骨休めしよう。こうしてホールデンはニューヨーク行きの夜行列車に乗る。

この夜汽車に一人の中年女性が乗ってくる。席は空いているのにわざわざホールデンの隣に座る。年のころは四十から四十五歳、性的魅力たっぷり、それでいて感じのいい美人。彼女はホールデンと同じクラスの生徒の母親だとわかる。ここからホールデンの嘘八百が始まる。自分の名はルドルフ・シュミットだと偽名を名乗り、彼女の息子は学校で一番人気がある生徒だとでたらめを言う。実際には、彼女の息子は「どん底のろくでなし」なのだが、この母親はホールデンの虚言に魅入られてしまう。「ミセス・モロウは何も言わなかった。でもね、そのときの彼女を君にも見せたかったな。彼女は座席にべたっと糊付けされちゃったみたいに見えたね。おおよそ世界中の母親ってのはさ、自分の息子がどれくらいすごい大物かって話を聞きたくてしょうがないんだよ」(96頁)<sup>5)</sup> ホールデンは、生徒たちが彼女の息子を級長選挙に推したが、息子が謙虚さからそれを辞退したという作り話までする。彼はそうしたでたらめを頭から信じ込んでしまう母親の愚かさを軽蔑しながらも、彼女の女性としての魅力には抗しきれない。彼は「カクテルでもいいがですか」と誘いをかけるが、「あら、あなたはまだお酒なんて注文できないでしょう」とやわらかく拒絶され、彼女との関係はそれ以上の進展を見せずに終わる。このさき彼女は物語の進行とは関係ないのだが、蘭の花をつけ、指を宝石で飾り、タバコを優雅にくゆらす夜汽車の中年女は鮮烈な印象を残す<sup>6)</sup>。

立松和平の『性的黙示録』は『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と取り立てて類似点のない長編小説である。零細な貸布団業会社に勤めるサラリーマン和田満夫が社長の水野徳三を殺すという殺人譚である。北関東を舞台とするこの小説には饒舌な方言と粘りつくような風土描写があふれる。振り切っても振り切っても執拗にまとわり着いてくる土着の人間関係の描写は『キャッチャー・イン・ザ・ライ』におけるホールデンの冬のニューヨークの彷徨の対極にあるとさえ言える。なにより、女の子とデートをしても最後の一线を越えられず、娼婦を部屋に呼んでおきながら何もしないホールデンの性的淡泊さに対して、『性的黙示録』で描き出されるのは錯綜した性的関係の網の目だ。た

えば主人公の満夫の妻あや子はスーパーの店員であるが、自動車修理会社の跡取りの安藤良二と性的関係を持っている。満夫自身も小料理屋の女、秋代と情を通じている。この満夫とあや子夫婦に社長の水野徳三がおぞましい夫婦交換を持ちかけてくるという複雑さである。

これら主人公たちのほかにもう一人重要な人物が登場する。満夫のいとこ中森広次が、殺人の罪を償って刑務所を出所してくるのである。広次は十日間朝から晩まで性交にふけた相手の女を殺して八年間刑務所にいた。「列車はいくらでもあった。新幹線に乗ると夕方には着くが、急ぐこともない。一番遅い夜行列車でいけば明日の昼前に着く」(95頁)<sup>7)</sup>。こうして広次は夜汽車に乗る。

「街は夜の底で苔のように光っていた。前の席には水色の無地のワンピースの瘦せた中年女が用心深そうな表情を崩さずに掛けていた。誰もいない四人掛けのボックス席は幾つもあったが、広次は女のいる席を選んだのだ」(99頁)

女は網棚から旅行鞆をおろして席を移動するが、広次は彼女を追いかけて、こう語りかける。

「失礼とは承知ながら、霊視させていただきました。どうも気になったものですから。あなたには不吉な相がでている。僕は怪しい者じゃありません。修行中の身で山籠りから出てきたばかりでございます」(99頁)

広次の言っていることもまた、ホールデンと同様の嘘八百である。しかし、ホールデンの場合には偶然、息子と同じ学校に通う生徒と乗り合わせた母親をはぐらかす口先だけの嘘であるのに対し、広次の真意ははるかに邪悪である。

「正直にお答え願ひましょう。あなたには水子がありますね。この世に産み落とさずに闇から闇に葬った子がいますね。どうですか。さあ、どうです」(99頁)

もちろんすべては口から出まかせなのだが、女は広次の問いに魅入られたようになり、自分には二人の水子があることを告白してしまう。広次は「僕は山から降りてきたばかりで霊感が強いのですよ。何でも見えるんだ」と霊視をしてみせる。この女の息子の小学生が、登校途中に突っ込んできた乗用車にはねられるだろう、それは水子の祟りだ、生きてかわいがられている弟を恨んで霊が悪さをするのだ。

必死になって「お坊さんの力でどうかお助けください」とすがりつく女に広次が与える助言はいかにも霊能者めいている。水子にも陰膳をして、菓子やアイスクリームも与えなさい、心の中で絶えず話しかけてあげなさい、手間を惜しんではいけない、あなたはもっとひどいことをしてきたのだから。

こうして広次は、ホールデンの「人を担ぐ」いたずらのレベルをはるかにこえて女の内面の闇へと降りてゆく。山から下りてきたばかりで霊能が強いと自称する未知の男に促されて自分の秘密を告白してしまうこの中年女の内面には、広漠とした無明がひろがっている。広次の「お話しなさい。[中略]僕から話すことも出来るが、それでは価値がない。あなたの身体の奥底から出る声でなければ何にもならないんですよ」という脅迫をともなった促しは、女から



次のような決定的な罪の告白を引き出してしまふのだ。

「お坊様、どうかお聞きやんしょ。わだしは男に抱かれに夜行列車で通ってるでやんす。何の包み隠しもいたしません。男は別れた亭主で、さっきの街で別の女と所帯をもってありますが、籍は抜いたども別れきれなくて、こうして夜行に乗るんでやんすよお。別れた亭主も同情して向こうの女には内緒で抱いてくれるんでやんす。あん時は思いきって判こついたども、結局わだしのほうが別れきれなくて、醜女の深情だって亭主には笑われるけど、わだしは切なくて切なくて、もうどうしたらいいかわかんねえでやんすよお。お助けなんしょ。お坊様、どうかお助けなんしょ」(103-104 頁)

水色のワンピースをまとった痩せた女の口から、強い北関東方言によってこぼれおちてくる性的修羅の告白。広次の虚言は、たまたま目に付いただけの女が秘め隠している生/性の暗部を明るみにさらけ出してしまうのである。

筆者が『性的黙示録』を読んだのは、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』とドストエフスキー『地下室の手記』を対比する論考を書き終えたばかりのときだった。まだ頭の中にはサリンジャー作品のあの場面この場面が、砕け散ったガラス片のように散乱していた。そのなかにはホールデンとミセス・モロウとの夜汽車での邂逅も含まれていた。中森広次と水色のワンピースの女の場面を読んだときに筆者を捕らえたのは強い既視感——冒頭に引いた用語を用いれば既読感 déjà lu に他ならない。筆者は特にサリンジャーとの対比の材料を求めて『性的黙示録』を手にとったわけではない。しかし中森広次が四人掛けのボックス席で痩せた中年女の向かいに腰掛ける場面は、ホールデンの隣にミセス・モロウが腰掛ける場面と鏡に映った像のように相似である。相似でありながらすべての含意は左右が逆になっている。どちらの小説でも、描かれているのは、何もなかったところからすれ違いのような邂逅が立ち上がってくる過程なのだが、細部がことごとく逆になっているのである。『キャッチャー・イン・ザ・ライ』では、空いている席がほかにあるのにわざわざ隣に座るのはミセス・モロウのほうである。ホールデンのスーツケースにベンシー校のステッカーが張ってあるのを見つけて彼女の側から話しかけてくるのだ。それに対して、『性的黙示録』では「あなたには不吉な相が出ている」と話しかけるのは広次のほうである。「じゃあ、あなたはベンシーの生徒さんなの？」というミセス・モロウの問いと「お坊さんすか」というワンピースの女の問いは驚くほど相似だ。ただし『キャッチャー・イン・ザ・ライ』では次々と問いを繰り出すのはホールデンではなくミセス・モロウのほうである（「ひょっとしてうちの息子のこともご存知じゃないかしら」「名前はなんておっしゃるの?」「あなたはベンシーが好き?」）。ホールデンは退学処分になってニューヨークへ帰るのだという事情を知られるわけにはいかず、偽名を名乗り、彼女の息子について出まかせを言い、休暇前に家に帰るのは「脳にちょっとした腫瘍みたいなのができている」せいだとまで言う。だが最後になるとそうして嘘をつき続けるのにも疲れてくる。「それから僕はポケットから時刻表を出して読み始め

た。嘘をつくのにもいいかげん疲れちゃったから。いったん嘘をつき始めると、そしてその気になればということだけど、それこそ何時間だってそれを続けることが出来るんだよ。冗談抜きで」(99 頁)。ここではホールデンの虚言癖が誇張気味に語られる一方で、ミセス・モロウにたいしてはそれを続けることが出来ないことが暗に強調されている。同級生アーネスト・モロウに対しては軽蔑しか感じない一方で、それに少しも気づかないミセス・モロウについては次のような寛大な理解を示す。「僕は彼女をじっくりと眺めた。彼女はぜんぜん間抜けには見えなかった。この人なら、自分の息子がどれくらい悪質なやつか、ある程度わかっててもいいはずなのになと思った。でもまあ、そういうものでもないんだろうね。相手はやっぱりなんといっても母親なわけだからね。そして母親ってのはさ、みんなちょっとずつ正気を失ってるものものなんだよ」(94 頁)。ホールデンはミセス・モロウの魅力を讃えながら、母親としての愚かさを冷静に眺めている。一方、広次はたまたま目に付いた女を畳み掛けるような嘘で追い詰め、罪を告白させ、ついには彼女を性的に征服するところまでいきついてしまう。彼がこの愚かな母親について抱く感慨は次のような暗澹たるものだ。「お前には水子が二人もいるのかと思い、広次は紅を齒にひろげた。薄く伸ばすと桃色になった。お前は二人も殺して無事なのだな。陰膳をだすほどのことで、これから先何事もなく生き延びていくのだな。広次も二人殺した。女と、女に宿ったに違いない小さな命だ。[中略] お前も二人殺したのかと広次はくりかえし思い、目の前の女の胸を裂いて中に詰まっているものを掴みだしたいという衝動を覚えた。たまたま目についた女が殺しているなら、たいていの女は一人や二人殺しているのだ。そうか、そういうことだな」(106 頁)。

ホールデンがミセス・モロウの息子に対する盲目ぶりから「そして母親ってのはさ、みんなちょっとずつ正気を失ってるものものなんだよ」という一般論を引き出して見せるとき、我々の立つ地盤は揺れていない。どんなに知的な女性でも、愛する息子のことはなかなか客観視できるものではないのだ。ここには我々の実感に反するものは何もない。こうしてホールデンのいくつもの虚言はむしろ常識の側に回収され、そこにあった一抹の不道德は免責される。それにたいして、女の墮胎と自分自身の殺人の罪とを等値しようとする広次の論理は、我々が簡単に承認できない次元へと飛躍してゆく。墮胎は殺人である→たまたま目に付いた女が二人殺している→たいていの女は一人や二人殺している…『性的黙示録』の登場人物たちは、姦淫の罪と殺人の罪とを結ぶこのねじれた三段論法が必ずしも誤りではないような世界の住人である。すべての母親はちょっとずつ正気を失っている、というホールデンの指摘に呼応するかのようには、『性的黙示録』では、水色のワンピースの女は、水子霊のたたりによってひとり息子が交通事故に遭う、という広次の「霊視」に簡単に我を失って、広次にすがりつくのである。

『その子は気持ちはやさしいけれど落着きがないでしょう。人にいわれたことにすぐに影響されて。失礼ながら成

續もよくない」

広次は女を観察していたのだった。女は泣きそうな顔をして何度も何度も頭を下げてきた。子供にだけは手を触れないで、と女はあたりを気にもせず悲鳴に近い声を上げた。広次は夜行列車の中だということをふと思い出した」(101頁)

まさにこの瞬間、テキストを読む「わたくし」の脳裏を『キャッチャー・イン・ザ・ライ』における夜汽車の場面がよぎるのである。ホールデンがミセス・モロウの息子について次のように言うのを思い出そう。

『「アーニーってそういうやつなんです。いちいちそんなこと話さないんだ。そこがやつ欠点なんです。あまりにも内気で奥ゆかしいんだ。たまにはちょっとリラックスしろって、お母さんから言ってやってください』

ちょうどそのときに車掌がやってきて、ミセス・モロウの切符を檢札した。それは話を切り上げるいいチャンスだった。でもしばらくのあいだ作り話ができてよかったと思う」(96-97頁)

ホールデンが言うアーニーは内気で奥ゆかしい、という出まかせが会話を切り上げるきっかけとなっているのに対し、広次が女の息子について言うあてずっぽうは図星をさせて女を半狂乱にさせてしまう。ミセス・モロウが夏休みに訪ねてきてねと言い残して途中駅で下車してゆくのに対し、水色のワンピースの女は広次に身体をあずける。ミセス・モロウのにおい立つような魅力に対し、『性的黙示録』では「女の化粧はところどころ剥げ、浅黒い肌に雀斑がちらばっていた」。こうして広次と水色のワンピースの女を乗せた夜行列車は闇の中をどこまでも進んでゆくのである。

### III. 「資質を備えた読者」をめぐる

ここで déjà lu についての議論に戻ろう。立松が『性的黙示録』を執筆していたとき、サリンジャーを念頭においていたかどうかはもはや問題ではない。冒頭のワフテルの言葉にあるように、立松の小説を読む「わたくし」が、ほかならぬこの「わたくし」が、サリンジャーの小説を念頭においているということがここでは重要なのである。念頭においている、というのは正確ではない。むしろ脳裏をよぎる、とか、ふいに会おうとでも言うべき感覚。それが déjà lu であり、déjà luこそが間テキスト性という概念の核心をなすものではないのか。

ここで立ち止まってみよう。déjà lu という、いわばきわめて独我的な経験こそ間テキスト性の本質である、となんらの留保なしに断言してしまっているものだろうか。たくさんの疑義が聞こえてくる。土田知則はその示唆に富む著書の中で、ロラン・バルトによる「作者の死」の宣告と引き換えに「読者」が誕生するいきさつをたどりながら、こう釘を刺している。「読者による解釈作用が、それ以前には実現していなかったような新しい意味を生産すると素朴に主張するのは、ロマン派的な虚偽への逆戻りにならないだろうか。テイラーは書く主体の解体を唱えることで、『獨創性』というロマン派的な神話を手放したはずであった。

だが、彼は作者に替えて読者を『父』の座に引き上げるることにより、再度それと同じ神話を取り込む結果になっていないだろうか<sup>8)</sup>。これは、解体されたはずの「主体＝作者」の残骸から、別の「主体＝読者」が権利の分け前を盗み去っていくことへの警告である。あるいはオア＝リファテールによる散文詩分析を敷衍する文脈で、「前もっての知識」が「問題の核心」であるとしつつも次のように述べている。「明らかに散文よりは散文詩の読者のほうが（より）高度な間テキスト的体験と、遠まわしな語法や非文法性に対する微細な注意を必要とする。だとすれば彼/彼女は『ふつうの』読者ではありえず、名探偵でなくてはならない。仮説上は際限のない置換（クリステヴァの間テキスト性）が存在する一方で、ある種の読み（気まぐれな、主観的な、無意味な）を排除するために特定化の動き particularization が作動してはならないのだ。よってリファテールのいう読者は見習いの徒弟や若いファンではまったくない。あるいは修辞学と言語学を高度に知悉した誰かでさえないのだ。それは蓄積された『読解』の経験の訓練所で形成される、資質を備えた読者なのだ。そのような読者の形成をリファテールはたんに『能力 competence』と呼んでいるものの、彼の言う一筆双叙法 syllepsis としての間テキスト性はたんなる déjà lu の経験ではなく、『幅広い読書経験のある widely read』、『教育の行き届いた well-educated』、『博識な erudite』といった用語で量的にも質的にも限定されるものなのだ<sup>9)</sup>。さきの土田が「読者」を『父』の地位に引き上げさせまいとしているのとは正反対に、リファテール/オア＝「読者」の資格をぎりぎり高いところまで引き上げることによって、「わたくし」の読書体験の中に偶発的に混入してくるにすぎない déjà lu を、間テキスト性とは似て非なる不適切な読解として排除するわけである。

リファテール/オアの言うような、ぎりぎりまで引き上げられた資格を満たした「読者」が仮に現実存在するとするならば、ナボコフの自伝（英語タイトル『記憶よ語れ』、ロシア語タイトル『向こう岸』）を精緻に分析した『ナボコフ：オートバイオーグラフィ』の著者マリコヴァをその例として挙げるができるかもしれない。ロシア文学における自伝小説の系譜のなかにナボコフの自伝を位置づけようとする彼女の仕事ぶりには「蓄積された『読解』の経験の訓練所で形成される、資質を備えた読者」という呼び名がふさわしい。比較の対象として挙げられるのはトルストイ『幼年時代』、アクサーコフ『孫バグロフの幼年時代』、ゴンチャロフ『オブローモフの夢』、ゴーリキーの三部作、ベールイ『コーチク・レターエフ』、等々。そこではこうした「伝統性」が「すでに読まれたもの уже читанное」と等置されていることに注目しよう。「伝統性、『すでに読まれたもの』の効果はナボコフの自伝、とくにそのロシア語版のコードに入り込んでいる。プーシキンのエレジーやゲルツェンの『向こう岸から』を思い起こさせる題名。作者の『文学的』系図。『我が家は父方はさまざまな親戚やアクサーコフ家、シシコフ家、プーシキン家、ダンザス家との姻戚関係からなっている』[...] 雑誌掲載時の、『初恋』、『わ



が叔父の肖像』といった章のタイトル。ナボコフの、田園の屋敷住まいの貴族の幼年時代の文体とリズムは、『貴族的』ロシア文学の全地層を参照することを要請する」<sup>10)</sup>「自らの幸福な幼年時代を『トルストイ的』イントネーションの助けを借りつつ記述しながら、ナボコフは『幼年時代の楽園』の形象を導き入れる。その形象のイントネーションが持つ『意味論的後光』を利用しながら、そのことによって彼がその形象の伝統性を自覚しているのだということを示し、と同時に自分自身をロシア文学の『大きな』伝統の水路のなかに位置づけるのだ」<sup>11)</sup>。ここでは「すでに読まれたもの」は客観的な文学史上の事実とほぼ同義である。マリコヴァが網羅的に挙げる作品群にはおそらく、これも読んでいない、あれも抜けているといった大きな見落としはないであろう。だからこそ、彼女自身、自らにとっての「すでに読まれたもの」と「伝統性」を無理なく等置できるのである。一方、そもそもトルストイ『幼年時代』になじんでいない日本の読者にとっては、その「意味論的後光」が『記憶よ語れ』に影を落としているなどということは、テキスト上の事実として指摘しようがない。論より証拠、『ナボコフ自伝 記憶よ語れ』の訳者大津栄一郎はその「解説」のなかでこう述べている。「かなり前のことだが、北杜夫『幽霊』を読んでいたとき、絶えずちらちらとナボコフのこの『ナボコフ自伝』を思い浮かべていた。もちろん、『幽霊』の方を早く読んでいたなら、『ナボコフ自伝』を読みながら『幽霊』を思い浮かべていたにちがいない。二つの作品が私にはよく似ていた」<sup>12)</sup>。ここでは英文学者である大津の脳裏にはトルストイ『幼年時代』は現れてこない。そのかわりにこのナボコフの自伝は北杜夫『幽霊』を読む「私」のなかに déjà lu を描き出すのである。これは、読書体験の履歴の差が、すなわちかつて読んだものの差が、間テキスト性の認識に大きな影響を与えることの証言である。

#### IV. 『性的黙示録』におけるドストエフスキーの痕跡

ここでこんな仮定をしてみよう。「蓄積された『読解』の経験の訓練所で形成された、資質のある読者」が『性的黙示録』を読むとしたら、とくに、標準的なロシア文学研究の訓練を受けた読者がこの作品を読むとしたら、そこに現れてくる déjà lu はどんなものだろうか。答はあまりに明らかである。そこに現れるのはドストエフスキーの諸作品の明瞭な痕跡なのである。貸し布団会社の社長の水野を殺害し、その遺体を車のトランクに隠したまま出社を続ける満夫は妻のあや子にも何事かを気づかれ、あや子は子供たちをつれて家を出てゆく。そして満夫に執拗に張り付くのが刑事の秋山なのだ。

「なんだか冷てえなあ。せめて顔見せるや。お前の気持を案にしようと思ってきたんだぞお。早くゲロってすっきりしろや。仏を浮かばせてやれや」「何処から詰めていってもお前に行き当たるんだよ。お前が犯人だとは言わないが、何か隠してるべ。話してくれや。これでもおまんまの種の仕事の邪魔はしねえようにってきをつかってるんだかなあ」(313頁)

「神隠しじゃあるまいし、一人の人間が急にいなくなっちゃうなんて、考えらんねえよ。しかも、社長が失踪してから、社員の一家がばらばらになってよ。あんまりにも符丁があいすぎるけどな」(321頁)

満夫は潔白を装いながらも、髭も剃らず着替えもせず、疲れきった様子で、周囲の目にはとうてい普通ではない。そして秋山に向かってこんなことを言う。

「こうねちねちやられっとおかしくなるなあ。何だか自分が本当に悪いことでもしたみたいにな気になるなあ。奥さん、ここんところ毎日こうなんです。私が社長に恨み抱くはずないでしょう。恩人なんだから。給料もらって、この世に置いてもらったんだから。なんかいつてやってくださいよ、奥さん」(322頁)

この台詞は『罪と罰』のラスコーリニコフがこう言うのを思い出させる。「ぼくはやつとはっきりわかりましたよ、あなたがあの老婆とその妹リザヴェータ殺害の件で、ぼくをはっきり黒とにらんでいることが。ぼくとしては、はっきり言いますが、そういうことはもうとうにうんざりしています。もし正当にぼくを追及する権利があると認めるなら、追及しなさい。逮捕するなら、逮捕しなさい。しかし面と向って嘲笑したり、苦しめたりすることは、許しません」<sup>13)</sup>

ここに『罪と罰』のラスコーリニコフと、彼を追いつめてゆく予審判事ボルフィーリイの関係を読み取るのはやや凡庸な読解かもしれない。満夫と秋山刑事のあいだには、ラスコーリニコフとボルフィーリイのあいだで繰り広げられる、「凡人」と「非凡人」をめぐる議論のような思想的やり取りはたしかにない。ボルフィーリイはラスコーリニコフが匿名で書いた、しかも書いた本人は活字にならなかったと思い込んでいた論文から次のような含意を読み取ってみせるのだ。いわく「凡人は、つまり平凡な人間であるから、服従の生活をしなければならんし、法律をふみこえる権利がない。ところが非凡人は、もともと非凡な人間であるから、あらゆる犯罪を行い、勝手に法律をふみこえる権利をもっている。たしかこういう思想でしたね、ぼくの読み違いでなければ？」<sup>14)</sup>。しかし同様の思想が『性的黙示録』に伏在していることは、満夫と広次のつぎのようなやり取りから明らかである。

「『…『我働くゆえに我あり』とか俗っぽいこといった男がいてな。何処まで旅にいったんだか、消えちまった。もしかその人が聞いてんのならいいえんだけど、働いて働きまくってちっとでもいい物食おういい家に住もうとする欲は、人間のきりもねえ業だ。何処までいっても、同じ道を歩いてるかぎり、業から離れられんなあ。その業を断ち切ってやんのも人助けだなあ」

『人を助けるのは選ばれた人間しかやっちゃいけない』(285頁)

満夫の水野殺しは、多額の横領がばれそうになっての、状況に追い詰められた拳銃の犯罪なのだが、同じ殺人者である広次を前にして彼はそれを〈業を断ち切る＝人助け〉と表現するのである。しかしここでそれ以上に注目すべきは、広次の「人を助けるのは選ばれた人間しかやっちゃい

けない」という台詞である。ここで広次は、一見、満夫が暗に水野殺しを正当化するのを厳しく牽制しているように見える。しかし広次の言葉を文字通りにとって見よう。業を絶つのは人助けだ→人助けは選ばれた人しかやってはいけない→裏を返せば、選ばれた人には人助け＝殺人が許されている…。ラスコーリニコフの論文から〈非凡人〉の思想が読み取られうるのと同様、広次の言葉からは〈選ばれた人間には殺人すら許されている〉という含意が導き出されてしまうのだ。

さらに満夫と水野の関係を眼を向けよう。そこには『カラマーゾフの兄弟』が濃い影を落としている。好色で、俗っぽい人生訓をたれる水野徳三の殺害は、明瞭に〈父殺し〉の意味を担わされているのだ。満夫は数千万単位の横領を社長の水野に気づかれる。それを帳消しにするかもしれない夫婦交換も不首尾に終わる。殺害のタイミングを狙って夜道に車を走らせる満夫は、助手席に乗った水野を、財産を蕩尽して自殺した父親のように感ずる。水野は、水商売の女に店を持たせる計画を満夫に得々と語って聞かせるのだ。「満夫は父松造と同じ車に乗っている気がした。父もこうやって女に金をせびられたのだ。父は崖の縁を歩けるところまで歩いていったのだった」(167頁)

ただし『カラマーゾフの兄弟』で〈父殺し〉を実行した下男・庶子であるスメルジャコフのイメージは、『性的黙示録』では、水野殺しを実行する満夫ではなく、あらかじめ殺人の罪を償って娑婆に出てきた従兄弟の広次に重なる。修行僧を詐称する広次には、どこかしら去勢派に例えられるスメルジャコフの面影があるのだ。『性的黙示録』においては、『罪と罰』および『カラマーゾフの兄弟』におけるドストエフスキーの中心的テーマは個々の人物の負う〈業〉の次元にまで因数分解されたあと、それら二作品とは必ずしも平行関係にないプロットの中で再現されている。満夫の殺人は横領を隠しきれなくなったの〈犯行〉であると同時に、満夫を永遠に下男の領域に置き続けようとする水野の父権主義に対する〈反抗〉でもあるのだ。そこではいわばラスコーリニコフの〈老婆殺し〉とスメルジャコフの〈父殺し〉が二重に引き継がれているのである。

## V. 「読者」≠「わたくし」

冒頭に引いたワフテルの指摘と同様の主張をする論者は他にもいる。高木信はこう述べている。「たとえば、テキストにある引用を発見する〔中略〕としよう。そのときそれが引用だとわかる場合とわからない場合とがある。すると『わかる人々』の解釈共同体と『わからない人々』が属する解釈共同体が存在するはずだ。そのときに研究主体は、『わかる人々』の解釈共同体を背景にして論を展開していることを忘れてはなるまい。あるいはそこに存在するはずの『期待の地平』をも視野に入れなければならないであろう。享受理論を無視して『読みとった私の責任』といって開き直ってしまうのであれば、それは研究主体の『責任』の放棄でしかない」<sup>15)</sup>。冒頭のワフテルと同趣旨の指摘といえるが、ワフテルと比べてみると、どうしても違和感があることは言わなければならない。それは高木が「読者」を、

『わかる人々』と『わからない人々』に截然と分離可能な、いわば経済学的に計量可能な群れ mass のようにみなしていることに対する違和感である。そして「研究主体」たるもの、敢然と『わかる人々』の立場に立つ責任をわが身に引きかぶり、網羅的で客観的な読みを志向すべきである…。ここまできると、ここで想定されている「研究主体」が、あまりテキストを読む「わたくし」と似ていないことにいやでも気づかざるを得ない。先に引いたオアーが主張しているのも、「読者」とは若い徒弟やファンではない、ということであった。つまり「読者」とは幅広い読書経験のある、職業的な研究者であって、好き嫌いの激しい、読書傾向にむらのある、必ずしも読書のための十分な時間を持たない「わたくし」のことではない(読者≠わたくし)。しかし生身の読者はたしてそれほど客観的で網羅的に〈読んで〉いるだろうか。ある種の文学理論の想定する「読者」は、知的資源の不均等な配分の波間を浮き沈みするこの「わたくし」とあまりにも違ったものではないだろうか。それは経済学が想定する「ホモ・エコノミクス(経済人)」という人間類型が生身のあなたやわたくしのことではなく、そこから一定の成分を抽出して塑像された仮構であるのと、どこか似ていはいないだろうか。市場の動向を熟知し、価格の百分の一の変化にも敏感に反応し、常に合理的選択を行う「ホモ・エコノミクス」。これが飲みかつ食べる現実の人間の似姿というよりは、ある種のモデルを動かすための理論的条件に過ぎないことは誰でも知っている。同様に、オアーがいうような「読者」もまた、ある種の理論を駆動させるための仮構に過ぎないことは明らかなように思われる。これはオアーというより、彼女が解説してみせるリファテールの読者概念の問題かもしれない。彼の『詩の記号論』<sup>16)</sup>で暗に前提とされている読者概念を簡潔に要約することは簡単ではない。そこで、リファテール『文体論序説』において提唱されている「原＝読者」なる概念を見てみよう。リファテールは当初用いていた「平均的読者」にかえてこの「原＝読者」なる用語を提唱する。語は変わっても、その要点は「表面的読解の持つ不十分さからも、また過度の読みの持つ行き過ぎからも等しい距離にある」<sup>17)</sup>という点にある。「彼はさまざまな読みの総計であって平均ではないし、テキストの刺戟因を拾い上げるための道具であって、それ以上のものでも、それ以下のものでもない」<sup>18)</sup>。「大切なのは読者の反応から内容を除外すること」であり、それによって「反応からその主観性をふるい落とす」ことができる<sup>19)</sup>。オアーが敷衍して見せているリファテールの読者概念とはそのようなものであり、そこでは偶然性や主観性の要素は可能な限り排除されている。それにしてもリファテールが「暗黙のテキスト相互関連性は、時間的、文化的変化による侵食を受けたり、特定の詩世代を生んだエリート言語に関する読者の無知に左右されやすい」<sup>20)</sup>と言うとき、彼もまた、テキスト読解の偶然性をめぐる問題系に気づいていないはずはないのだが。テキストを読む生身の「わたくし」の読書履歴には欠落や偏差が絶えずついて回り、いつまで経っても「あるエクリチュールを構成するあらゆる引用が、一つも失われることなく記入される空



間」<sup>21)</sup>にはなりようがない。「読者」が「歴史も、伝記も、心理ももたない人間」であり、「書かれたものを構成している痕跡のすべてを、同じ一つの場に集めておく、あの誰かにすぎない」<sup>22)</sup>ものだとしたならば、それは定義からいって不可能なことなのだ。「研究主体」がなすべきことはむしろ、この理念型としての「読者」と生身の「わたくし」との落差を精確に記述することだと言えはしないか。事実『ナポコフ自伝 記憶よ語れ』の訳者の解説が興味深いのは、ナポコフ作品と北杜夫『幽霊』とが「私には」似ていた、と率直に語られるからである。そこには典型的な日本の読者（これも一種の理念型であるが）におけるロシア文学史の知識の欠落が〈語られない〉ことによって語られているといつてよい。ワフテルが言うように、認識されない引用は存在しないのだから。ここには『『そう私は読んだ』と言うやっかいなしっぱ』<sup>23)</sup>がのぞいている。このしっぱは、生身のわたくしが理念的な「読者」ではない以上、切除不可能なものである。そしてこのしっぱが突如あらわになる瞬間の姿こそ déjà lu であり、テキストを読むわたくしの生のリアリティを記述しようと思えば、手持ちの déjà lu を洗いざらい提示してみる以外にないのではないか。筆者の経験の教えるところでは、このとき初めて間テキスト性はデータベース化された資料の集積ではなく、生きられた経験となる。

## VI. 「規範的な読解」という陥穽

さきに筆者は、〈標準的なロシア文学研究の訓練を受けた読者〉という理念型をあえて設定し、彼が『性的黙示録』を読むときにドストエフスキーの諸作品の déjà lu が立ち現れてくるだろう過程を描いてみた。これは生身の読者である「わたくし」が情動的に知覚した déjà lu ではなく、筆者がとくに本論のために、立松作品の細部にドストエフスキー的語彙を代入して行った論理的な演算である。そのような知的操作によって生み出される déjà lu もまた「インターテキスト」のひとつであることは間違いない。とりわけ『性的黙示録』を分析しようと思えばドストエフスキーの痕跡を無視できないことは、誰の目にも明らかなのだから。しかし上記のような試みは、ドストエフスキー解釈共同体の権威がこの作品を前にして必ずや課してくるであろう規範的な読解の拘束を進んで予想し、受け入れるという事態と紙一重である。それは時として、「そう私は読んだ」と告白する率直さの中に隠れているオルタナティブな読解可能性の芽を握りつぶしてしまう危うさをはらんでいないと果たして言い得るだろうか。ふたたび経済学の比喩を用いるならば、そのような営為は「ドストエフスキー専門家ならこう反応するに違いあるまい」という、株価予想に似たものである。株価予想とはケインズによれば、ある種の美人コンテストのようなものだ。そこでは人は、自分が美人だと思う候補者に投票するのではなく、どの候補者がもっとも得票を集めるかを予想して投票するのである。「たくさんの読者が賞金ねらいのために投票するこの美人コンテストにおいて、読者に選ばれる美人とは、その顔が美人であると平均的な読者が予想すると平均的な読者が予

想する……と平均的な読者が予想している美人なのである。そこでは、投票に参加するそれぞれの読者が、ほかの読者もみなじぶんとおなじように予想すると信じていればいるほど、すなわち、おたがいの合理性を信じていればいるほど、ある顔が美人であるということは、それぞれの読者の個人的な判断からも、読者全体の平均的な意見からも無限級数的に乖離していく」<sup>24)</sup>。むろんここでの「読者」は、この美人コンテストを主催する大衆新聞の読者である。彼らの目的は賞金であり、誰が本当に美人なのか（＝何が本当の美なのか）は彼らの真の関心事ではない。

では文学研究がそのような振る舞いに陥って自らの創造性を抑圧するのを回避するためには、何をすればよいのだろうか。自分が美人だと思う候補に一票を投ずることが必要なのではないか。それが、文学的経験の実質を説得的に記述することにつながるのではないか。先行研究をひとわりと渉獵しても切除できない、それどころか他の論者の見解に耳を澄ませば済ますほどますます突出してくる『『そう私は読んだ』というやっかいなしっぱ』を記述することにこそ、文学研究への真の貢献があるのではないか。作品 B が作品 A に酷似していることを発見するときのわたくしの情動のうずきのなかにこそ déjà lu＝間テキスト性の本質がかくれているのだから。Ⅱ章で詳述したのも、『性的黙示録』には、ドストエフスキー的語彙を代入した演算だけでは説明できない深くほみがある、ということである。アレンはリファテールの間テキスト性概念に批判を加えてこう述べている。「読者は数多くの背景をもち、数多くの読書経験を積んでいる。読者は明らかに、単一の『社会方言』を共有しているわけではない。それゆえ我々は、読者の前提について、それがまるで単独の、もしくは予言可能な現象であるかのような言い方をするわけにはいかない」<sup>25)</sup>。然り、生身の「わたくし」に現実生じた強烈な déjà lu が『キャッチャー・イン・ザ・ライ』のミセス・モロウの場面であるという生の事実は取り消しようがないのだ。

## VII. つながりあう主人公たち～ふたたび『性的黙示録』と『キャッチャー・イン・ザ・ライ』について

ここで再びサリンジャーと立松の対比に戻り、それをもう少し掘り下げてみよう。殺人の罪を償って出所してきた広次はいかがわしい霊能者となる。彼の口からこぼれ出る「御霊示」は人間を胎児として語る独特のものである。「……見えざる宇宙には幾重にも膜が張りめぐらせてあるのだぞよ。我々はこの膜によって護られているのであるのである。我々は母の胎内に於て人間としての完全なる生育をした後に誕生する。母の子袋こそが第一の膜なのだ。我々はこの膜を破らねば生成発展をなし得ない。[中略]かくして第一の膜を突き破るのが人の誕生なのである。[中略]水子はついに一枚の膜も破れなかった不幸者なのである」(280–281 頁)。広次はこの「御霊示」を、「膝を抱えて胎児のように丸く小さく」なってカセットレコーダーに録音するのである。この場面を満夫に見られてしまった広次はこう解説してみせる。「昔から人生は旅だといったんべ。ほら、赤ん坊

が生まれてくる時一緒に出てくる胞衣<sup>えいゐ</sup>は、赤ん坊が前世からかぶってくる旅の笠だとかいうべ」(284頁)この広次の、胎児を包み込む羊膜への固執は、「わたくし」を、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』に関する次のような指摘へと送り返すのだ。「…The Catcher in the Rye には『ディヴィッド・コバフィールド』みたいな前置きからはじめるつもりはないと書いてあるけど、僕はホールデン・コールフィールドという名前が気になるわけ。何人かに一人、たまに頭に膜をかぶって生まれてくる赤ん坊がいて、ディヴィッド・コバフィールドも赤ん坊のときに膜をかぶって生まれてきた。その膜が乾いて魔よけとして売られる。あれを英語でコール (caul) というんですよ」<sup>[26]</sup>。「胞衣<sup>えいゐ</sup>」と「コール (大網膜)」は必ずしも同じものを指すのではないようだが、前者が広次によって「赤ん坊が前世からかぶってくる旅の笠」とされるとき、それはいやおうなしに赤ん坊がかぶっているコールの含意と呼応してしまう。これらの語を媒介にして、広次とホールデンという、一見何の共通点もない文学的形象たちがひそかにつながりあっているのが、テキストを読む「わたくし」には見えてしまうのだ。冒頭のワフテルの言葉を繰り返そう、ただし主語をあなたから「わたくし」へ入れ替えて。「わたくし」にはそのつながりが見えてしまい、そのつながりの意味するところは(「わたくし」があえてそれを追求するならば)まずもって「わたくし」の読書体験によって決まってくるのだ。こうして『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を再読する「わたくし」の中にある錯視が生ずる。ミセス・モロウもまたその下腹部に水子の霊を宿している。ミセス・モロウもまた男に抱かれるために夜汽車に乗っている。そしてその車内で、頭部に caul をかぶってこの世に生を受けた幸運な少年を発見し、そのとなりに腰かける…。

ただし、ここで『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と『性的黙示録』の共通点は不意に途切れる。ホールデンは自分の虚言癖に疲れを感じ始めて口をつぐむ。ミセス・モロウは持っていた「ヴォーグ」を読み始める。ホールデンは窓の外を見ている。ミセス・モロウは、アーニーを訪ねて遊びに来てちょうだいね、と言いついて残してニューアーク駅で汽車を降りて行く。二人の間にはついに性的関係は結ばれない。そしてこの先も、ホールデンは女性と性的関係をもたないままで小説は終わりを迎える。彼の時間は童貞喪失の寸前で永遠に静止したままであるかのようだ。

ローゼンという論者がホールデンの性にたいする気後れについて興味深い指摘をしている。「ホールデンにとっては、性は世界への究極の関与である。それは時間への最終的な入り口なのである。ホールデンは変化を受容することが出来ない。そして時間こそは変化の尺度である。時間は変化が棲み付く媒介だ。そして性こそ、人が時間へと誘い入れられる通路なのだ」<sup>[27]</sup>。このことは『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を『性的黙示録』と対比して読むとき、一層明瞭である。『性的黙示録』では、性の門をくぐって時間の中に入り込んできた者たちは、荒れ狂う時間の流れのなかで、姦淫し、横領し、蕩尽し、殺し、殺される。殺された者は遺棄され、どろどろに腐敗し、朽ち果ててゆく。こ

のすべてが性＝世界への究極の関与から始まっているのである。作品の随所で描かれる、河川の決壊によって床上まで上がってくる洪水は、そのまま、登場人物たちを呑み込む時間の奔流のアレゴリーとなっているように思われる。

## VIII. 結語～解釈共同体の権威と一人称特権を調停するものとしての déjà lu

あえて解釈共同体という概念を用いるならば、そして引用を認識できる者たちの解釈共同体とそうでない者たちの解釈共同体を分けなければならないとするならば、テキストを読む「わたくし」の中ではいくつもの解釈共同体の領土が重層している。テキストを読む「わたくし」は解釈共同体を構成する最小単位であるはずだ。しかしテキストを読む「わたくし」という磁場は、分割不可能 in-dividual ではなく個 individual が、サリンジャーの読者であると同時に立松の読者であり、同時にドストエフスキーの読者であり…というようにさらに小さな単位に無限に分解してゆく場なのだ。この読書体験の無限の重層の中で起こる現象が déjà lu である。誰もが同一の déjà lu を持つと仮定することは現実的ではないだろう。テキストを読む「わたくし」は時にとつぴな、あるいは公言するのをはばかれるような déjà lu を持つことだってある。分析哲学における「一人称特権」という概念を用いよう。「わたくし」は脚が痛い。この訴えを聴いた専門医は診察をほどこし、レントゲン写真を撮り、そこに何らかの異常(たとえば骨折)を発見する。「わたくし」の愁訴は他者によって承認され、治療が始まる。だが常にそうとは限らない。何の異常も発見されず、それでも執拗に痛みを訴え続けるとき、何が起こるか。あるいは、もっと不可解な愁訴が「わたくし」の口をついて出てくるとしたら。「わたくし」の訴えは理解不能なものとして退けられる。つまり一人称特権は棄却される。「これはおそらく患者なりのアスペクト報告なのだろう。だが、さらに治療を続けた医者にとってはともかく、この場面だけに向き合わされた私には、この報告を読み解くことは出来ない。そして、読み解くことができないのであれば、そこにはいかなる一人称特権の余地もない」<sup>[28]</sup>。広次とワンピースの女の出会いの場面と、ミセス・モロウとホールデンの場面のあいだには間テキスト性が認められると訴える「わたくし」の読解もまた、他の読書体験の持ち主によって追体験され検証され得る形で提示されなければならないだろう。筆者は本論でひとつの déjà lu を語った。作品 A を読んだ経験が作品 B を読む経験に干渉し、さらにそれが作品 A を再読する過程にも逆流して、もはや二つの作品を切り離しては読めなくなるという「わたくし」の経験をたどりなおしてみた。しかも「読み取った私の責任」の名のもとに他者の理解を遮断するのではなく、引用を重ねながら、他者によって追試可能な形でそれを行うことを試みた。さらにここで、ラスコーリニコフの論文から非凡人の思想を読み取った予審判事ゴルフィーリイのように「ぼくの読み違いでなければ」という慎重な留保もつけ加えようと思う。本論で記述したような déjà lu の認識が、間テキスト性が生きられた経験として立ち上がってくる過



程だと筆者は考える。

あるいはあまりに異様な読書体験の報告として、この「わたくし」の一人称特権は棄却されるだろうか。解釈共同体という概念の提唱者であるフィッシュはこう述べている。唯我論の恐怖など存在しない、自我とテキストのあいだには対立は存在しない、自我もまた社会的構築物なのだから「自我がテキストに付与する意味は自我のものではなく、自我がその函数であるところの解釈共同体（または解釈共同体群）に起源がある」のだと<sup>29)</sup>。しかしこのことは、解釈共同体が標準的な/妥当な/客観的な読解の名の下に読みの拘束を課してくることと紙一重である。ときに解釈共同体の権威 authority of an interpretive community は一人称特権 first-person authority と正面から衝突し、この二つの authority 権威/特権は激しくせめぎあう。このとき「わたくし」に客観的に裏づけ可能な独自の déjà lu があれば、読解の拘束を一定の線まで押し返すことができるはずだ。冒頭のワフテルが述べるとおり、作品 B のなかに作品 A の引用を認識できるかどうかは本質的に個人的なことである。多くの読者がそのような認識を持っていないときこそ好機である。解釈共同体の権威の拘束をままと出し抜くことができる、という意味合いばかりではない。むしろそのさい déjà lu＝間テキスト性は、解釈共同体の権威と一人称特権の相克を調停するものとして作用するであろう。そのようなときこそ「わたくし」は、一般的に妥当とされる読解に独自の間テキスト的読解を対置し、文学作品の読解可能性の幅を広げること貢献できるのである。そして作品 C を、作品 D を、作品 E を読む体験がさらなる déjà lu を生み出すとき、作品 A によって規定されていたはずの作品 B の相貌は再び一変するかもしれない。こうしてテキストを読む「わたくし」は、無数の解釈共同体の辺縁であるどこかで、生の終りが来るまで間テキスト的読解を汲み上げ続ける。

註

- 1) Wachtel, Andrew Baruch. Plays of Expectations. Inter-textual Relations in Russian Twentieth-century Drama. University of Washington Press. Seattle ; London. 2006. P. 4.
- 2) ロラン・バルト『物語の構造分析』, 花輪光訳, みすず書房, 1979 年, 98 頁.
- 3) Barthes, Roland. Oeuvres complètes. III. Livres, Textes, Entretiens. 1968-1971. Editions de Seuil. P. 912.
- 4) Culler, Jonathan. The Pursuit of Signs. Semiotics. Literature. Deconstruction. Cornell University Press. Ithaca : New York. 1981. P. 102.
- 5) サリンジャーからの引用は J.D. サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』, 村上春樹訳, 白水社, 2003 年により, たんに頁数を示す。なお以下の原典を参照した。J.D. Salinger.

- The Catcher in the Rye. Little, Brown, and Company. 1991.
- 6) 野間正二『『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の謎を解く』, 大洋社, 2003 年, 29-40 頁にはこの場面に関する詳細な分析がある。
- 7) 立松からの引用は, 立松和平『性的黙示録』, 河出書房新社 [河出文庫文芸コレクション], 1990 年により, たんに頁数を示す。
- 8) 土田知則『間テキスト性の戦略』, 夏目書房, 2000 年, 175 頁. なお引用中のテイラーは M. C. テイラー『さまよう——ポストモダンの非/神学』, 井筒豊子訳, 岩波書店, 1991 年をさす。
- 9) Orr, Mary. Intertextuality. Debates and Contexts. Polity Press. Cambridge ; Malden, MA. 2003. reprint 2005. 2006. P. 39.
- 10) Маликова, М. Набоков : авто-био-графия. Санкт-Петербург. 2002. С. 57.
- 11) Там же. С. 59.
- 12) 大津栄一郎「解説」, ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフ自伝 記憶と語れ』, 大津栄一郎訳, 1979 年, 晶文社, 259 頁. 強調引用者。
- 13) ドストエフスキー『罪と罰 下』, 工藤精一郎訳, 新潮社 [新潮文庫], 1986 年, 120 頁. なお以下の原典を参照した。Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Т. 6 Ленинград. 1973
- 14) ドストエフスキー『罪と罰 上』, 工藤精一郎訳, 1987 年, 新潮社 [新潮文庫], 453 頁.
- 15) 高木 信「テキスト理論の来し方・行く末 日本の、あまりに日本的な……」, 高木 信・安藤 徹編『テキストの性愛術【物語分析の理論と実践】』, 森話社, 2000 年, 127 頁.
- 16) M・リファテール『詩の記号論』, 斎藤兆史訳, 勁草書房, 2000 年.
- 17) ミカエル・リファテール『文体論序説』, 福井芳男・宮原信・川本皓嗣・今井成美訳, 朝日出版社, 1978 年, 45 頁.
- 18) リファテール『文体論序説』, 45-46 頁.
- 19) リファテール『文体論序説』, 46 頁.
- 20) リファテール『詩の記号論』, 184 頁.
- 21) ロラン・バルト『物語の構造分析』, 花輪 光訳, みすず書房, 1979 年, 89 頁.
- 22) ロラン・バルト『物語の構造分析』, 花輪 光訳, みすず書房, 1979 年, 89 頁.
- 23) 和田敦彦『読むということ テキストと読書の理論から』, 1997 年, ひつじ書房, 11 頁.
- 24) 岩井克人『二十一世紀の資本主義論』, 筑摩書房 [ちくま学芸文庫], 2006 年, 29 頁.
- 25) グレアム・アレン『文学・文化研究の新展開 間テキスト性』, 森田 孟訳, 研究社, 2002 年, 160 頁.
- 26) 斎藤兆史・野崎 欽『英語のたくらみ, フランス語のたわむれ』, 東京大学出版会, 2004 年, 213 頁. この発言は斎藤のものである。
- 27) Rosen, Gerald. "A Retrospective Look on The Catcher in the Rye" American Quarterly 29 (Winter 1977). p. 555.
- 28) 野矢茂樹『哲学・航海日誌』, 春秋社, 1999 年, 190 頁.
- 29) スタンリー・フィッシュ『このクラスにテキストはありますか』, 小林昌夫訳, みすず書房, 1992 年, 122 頁.

# Intertextuality and déjà lu Salinger's and Dostoevsky's reminiscences in Wahei Tatematsu's *A Sexual Apocalypse*

By

Hiroaki UMEMURA

(Received May 13, 2008/ Accepted September 2, 2008)

**Summary :** The aim of this study is to examine the relationship between intertextuality and déjà lu. An intertextual reading consists of a recognition of something already read, i.e. déjà lu. As Jonathan Culler puts it, an intertextual code is nothing more than this. The author of this study juxtaposes a scene from Wahei Tatematsu's magnum opus *Seiteki Mokushiroku* [*A Sexual Apocalypse*], which is yet to be translated into other languages, and one from J.D. Salinger's *The Catcher in the Rye*. In Tatematsu's novel, Koji, having finished an 8-year term in jail for murdering a woman, takes a night train and encounters an ugly middle-aged lady with a heavy northern Kanto dialect. Lying that he is a priest with a mysterious prophesy, he compels her to confess that she had her two babies aborted in her past. This scene somehow resembles Holden's encounter with his classmate's mother Mrs. Morrow on the night train bound for New York. Holden also lies that his name is Rudolph Schmidt and tells Mrs. Morrow that her son is a decent nice boy, which is not the case. When the author of this study came across the scene of Koji's encounter with an ugly lady, he experienced a strong feeling of déjà lu, although details from both novels do not fully coincide. While an average student of Russian literature would find that Tatematsu's novel is full of Dostoevsky's reminiscences, the déjà lu of the author of this study suggests that a comparison with *The Catcher in the Rye* is also of great use to elicit the traits of Tatematsu's novel. Thus, if one wishes to depict an intertextual reading as a lived experience, one has to juxtapose one's own déjà lu and what Michael Rifaterre's "arch-reader" would find in the novel.

**Key words :** intertextuality, Salinger, Dostoevsky, Tatematsu

---

\* Foreign Language Studies (Russian), Faculty of Bioindustry, Tokyo University of Agriculture